

KILC 通信

Kanagawa Independent Living Center News

2013 Spring



巻頭言

いわゆる「障害者総合支援法」（障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援する法律）が、本年4月1日に施行された。

これまで法の目的に書かれていた「自立」に替わって、「基本的人権を享有する個人としての尊厳」が明記された。また、障害福祉サービスに加えて、地域生活支援事業による支援が明記され、それらの支援を総合的に行うための法改正とされている。言ってみれば、障害者の自立を支援するというのではなく、障害者が生活しやすいように支援を総合的に行うこととする、ということになるようだ。

改正障害者基本法に盛り込まれた目的や基本原則も、新法の理念として規定されている。可能な限り身近な場で必要な支援を受けられる、社会参加の機会の確保、他の人と共生することを妨げられない事、社会的障壁の除去。

新法の存在に文句を言うつもりは、さらさらない。そこに掲げる社会が現実のものになれば、障害者は確かに住みやすくなるのであろう。一人ひとりの状況に応じた支援は、生きていくために欠くべからざるものであることは言うまでもない。

でも、待てよ。「自立」に替えてるのはどういうことだ。一人ひとりの意思が確認されながら生活することで、個人の尊厳が確保できるのではないか。それが「自立」ってことじゃなかったのか。必要十分に支援します、というだけじゃだめだろ。いつまでも、障害者は社会に守られる存在っていう気持ちで、なんだか見え隠れしているぞ。

私たちの法人名にある「自立生活支援」は、障害者が一人の人間として意志を持って生きていくための全面的支援を意味すると考えている。「総合」という、丸抱えの言葉でくくってはいけない。障害者は、全てをほしがっているのではない。「自立」こそが求めるところなのだ、と新たに肝に銘じたい。

治郎

わたしの 就職体験記

わたしたちの事務所で活動されていた障害当事者のお二人が先日、相次いで就職されました。そこで今回は、彼らの生の声を聞いていきたいと思います。

Story 1. 岩淵さん

重度の障害を持ち、長年引きこもり生活をしていた私が、この一月から企業に就職することになりました。その経緯ときっかけを少しお話ししたいと思います。

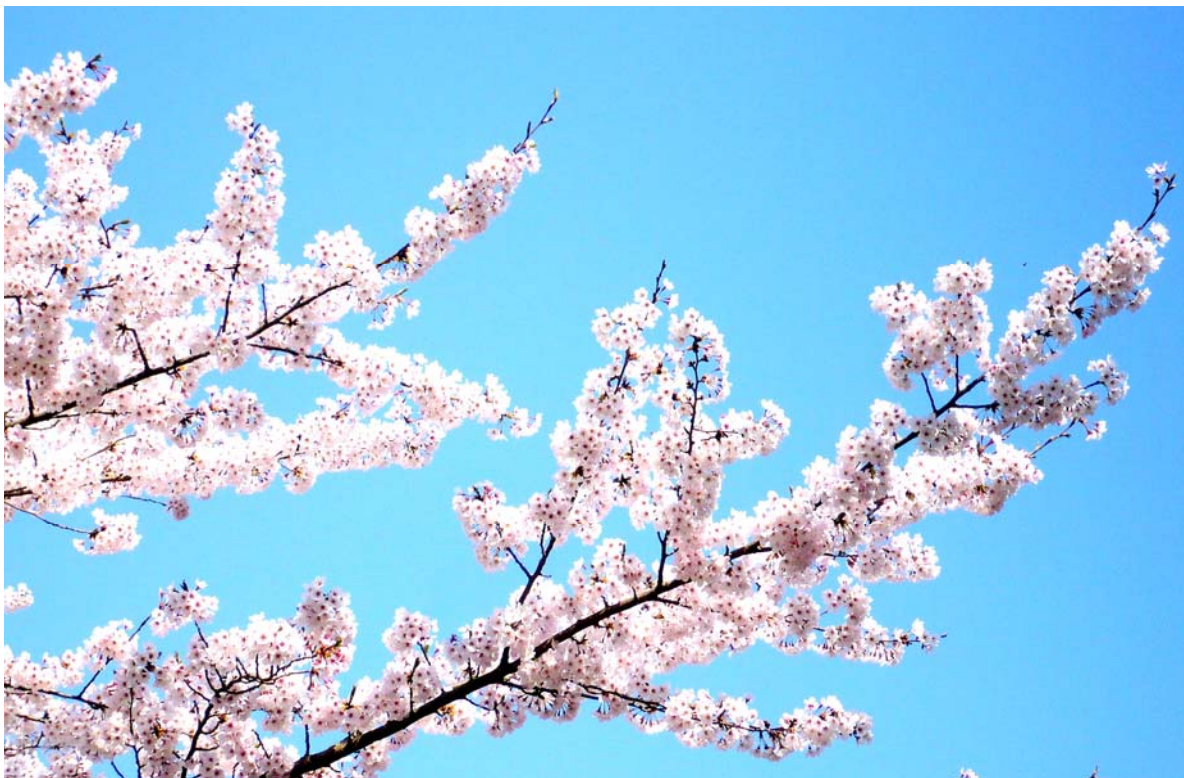
私は大学生時代、企業での就労を目指し頑張っていました。それで100社以上応募したのですが、結果面接まで辿り着いたのがわずか1、2社というとても苦い経験をしました。それで、「重度障害者には、就職は難しい」と考えるようになりました。また、在宅雇用だとしても「この言語障害じゃ、到底無理でしょ」「たとえ面接まで残れたとしても、子供っぽく、働いた経験がまったくない自分は採用されない」と就職をほぼあきらめていました。そして、自宅に引きこもるようになりました。

しかし、7年ほどの自宅での引きこもり生活を経て、キルクと出会いました。キルクでは「働く」経験をさせて頂けたことと、色々な活動を通じ障害について前向きに捉えられるようになったことが、自分にとって大きかったです。私は普通学校に通っていたのですが、そこでは「〇〇できない自分」が目立って問題となるという経験しかしていませんでした。そのため、自分の持つ障害を「否定的」な捉え方しかできていなかったことに、キルクに関わるようになって気が付きました。以前は、自分の障害についてなるべく説明しないようにしていました。例えば、学校や企業との面接時にも移動とトイレの問題だけを伝え、あとの細かい問題—ノートが取れない、コート等の上着が一人では脱げないなど—はなるべく言わないようにしていました。「うちでは、対応できません」と言われるに違いないと思っていたからです。しかしキルクで、一般企業に対する障害への理解を促進する研修会などにかかわるようになり、考えが変わりました。「理解してもらうためには説明が必要」という基本的なことに気づかされました。

そうした、自分の障害に対する捉え方の変化が、今回就職した企業の面接では大いに役立ちました。面接内容の八割ぐらいは私の障害に関することでした。以前の私なら「不利になるから、ごまかそう」と考えたような質問にもはっきり答えられたことが、良い結果につながったと思っています。

長い引きこもり状態を抜け出してキルクで活動するようになってから、一年と少しで就職できるとは夢にも思っていませんでした。キルクでの活動を通して、障害に対し前向きな気持ちで向き合えるようになり、自信も取り戻せました。キルクで得たものは大きかったと思います。そのような機会を与えてくださり、本当にありがとうございました。また、就職を支援してくださった皆様にもお礼申し上げます。

ありがとうございました。





Story 2. 星さん

在宅勤務は初めての経験で不安もありました。しかし、周りの方々の協力や助けによって安心して仕事に励むことができています。

ひとつには、私が働くチームの中でリーダーを務めている方も障害者であり、障害をよく理解して接して下さっていることが大きな助けとなっています。働いていると、「もっと頑張りたい」と思っても障害により思うようにできないことがあります。実際、初めのうちは頑張りすぎてしまうこともありました。「無理しなくてもいいよ」の一言が助けになりました。また、「何か困っていることはないですか？」や「自分のペースで大丈夫ですよ」といった気遣いの言葉も、障害を理解してもらいながら働けるという安心感につながっています。

そして、家族の協力にも感謝しています。在宅（自宅）での仕事ということで、勤務時間中には仕事に集中できるような環境が必要となりますが、その点でよく協力してくれています。

このように、不安のあった在宅勤務も周囲の皆さんの温かな協力によって、続けることができています。この経験を通じて、職場における相互理解の大切さや、それに基づいた気遣いの重要性を学ぶことができました。それは障害者の雇用に限った話ではなく、そうした職場はだれにとっても働きやすい職場となるのではないのでしょうか。

支えてくださる皆さんへの感謝と共に。

「福島を伝えたい」

NPO法人いわき自立生活センター 小野和佳



皆様初めまして。私は、福島県いわき市のNPO法人いわき自立生活センター（以下いわきCIL）の小野和佳と申します。昨年の9月より神奈川県相模原市に移住しています。自立生活センターの繋がりを活かし、神奈川県福祉事情を学ぶことから始めようと神奈川県障害者支援センター（以下KILC）に週一度通わせていただいております。1982年11月生まれの30歳脳性まひ。初めて県外での生活のスタートとなりました。

震災直後のいわきCILの動き

なぜ、神奈川県に移住か。というお話をさせていただく前に、時間を少し戻し震災直後、いわきCILはどのような行動をとってきたかをお伝えします。震災直後の大きな動きは新宿区の戸山サンライズへの避難の決意でした。いわきCILは原発の事故以降、物流の停止・医療機関の停止・ガソリンの不足・訪問看護が自宅に訪問できない等様々な問題に追い込まれました。中でも特に衝撃的な出来事だったのは、「ヘルパーも被災者であり、避難の選択肢がある」ということです。これは原発事故特有のものなのかもしれませんが、今ヘルパーとして障がいをもつ方の隣にいる方が「避難をしたい」と申し出るのです。その時のなんとも表現できない心の衝撃は、忘れることができません。このような様々な問題を回避する為に避難をするには、多くの壁がありました。たとえば、「**ガソリンが無い。避難をする人数が、50人以上と想定されるが、その様な場所を確保できるのか**」などです。正直この状況下において、この二つのハードルを越えるのは大変厳しいと私は思っていました。3月16日、私達はまず法人が加盟するJIL（全国自立生活センター協議会）のメーリングリストで、避難先の確保とガソリンの調達の救援を依頼しました。すると3時間後には「東京都新宿区にある戸山サンライズ（新宿区障害者総合福祉センター）に50人分確保できました。と連絡がはいりました。ガソリンは各センターが20リッターの携行缶の確保の為にホームセンターに走り、翌17日には、なんと広島県の自立生活センターから一昼夜かけて200リッターのガソリンが届けられました。18日には静岡から30リッターが届きました。

私達はセンターの利用者、ヘルパーに呼びかけをし、最終的に集まったのは、34名（利用者8名・ヘルパー10名・本部員3名・家族13名）でした。

この人数の内訳に様々な事柄が現わされています。やはり、知らない地域に行く不安、初めての人に介助されることへの不安、他の家族が残ると言えば一人で避難することはできない…等の理由からです。もちろん、いわきに残るといった方への支援を停止する訳にはいきません。そのためのヘルパーもいわきに残っていただくこととなりました。戸山サンライズへの避難は、いわきに残り懸命に生活をする障がい当事者の方、それを支える介助者や支援員の為でもありました。

避難の準備から避難生活をした1カ月以上もの間、私は当事者団体のネットワークと力をこれでもかというほど体感させて頂きました。この様な支援をして下さったことに感謝の気持ちでいっぱいです。改めてお礼申し上げます。

これまでの経験で見えたもの、そしてこれからを考える

災害時の心理から見える、「自己確認・判断」を養う必要性

災害時心理の研究者によると災害時には心理用語で「正常性バイアス」という心理メカニズムが起きるそうです。これは、危険なことに遭遇したときに、そのリスクを「危険ではない」と思い込もうとする心理傾向を言います。これは周囲が行動しないと自分も行動を起こさない「同調性バイアス」、危険や異常が状況の中に紛れ込んでしまって気づけない「同化性バイアス」の二つが重なりより強く働く心理状態の様です。すると、災害時どのような状況が生まれるか。強いリーダーシップに引き寄せられる傾向にあるということです。その様な心理状態だからこそ強いリーダーシップは必要不可欠です。しかし一方で、「リーダーも判断ミスがあるかもしれない」という冷静さも必要です。自分が不安だと思うのであれば、必ず確認をする。日常からこのような習慣をつけておく必要はあるようです。

変わらない活動続ける

前段でお話ししましたが、私は今、福島県の障がい者の県外移住のお手伝いをさせて頂く目的もあり、相模原市内に移住をしてきました。一人一人の選択肢を増やしたい。その想いのみです。自分達らしく生活できる地域づくりの必要性を、改めて実感しています。駅にエレベーターができれば、全ての人が使いやすい駅になる。それと同じように私達障がい者が積極的に「防災」を考えれば、よりよい地域ができると考えています。

「その時は、その時」そんな声も聞こえますが、今も尚収束しない原発事故、3.11後も相次ぐ災害、「その時はその時」と思えるほど「ごくまれに起きるもの」ではもうないのでから。

NPO法人 神奈川県障害者自立生活支援センター 事務所案内

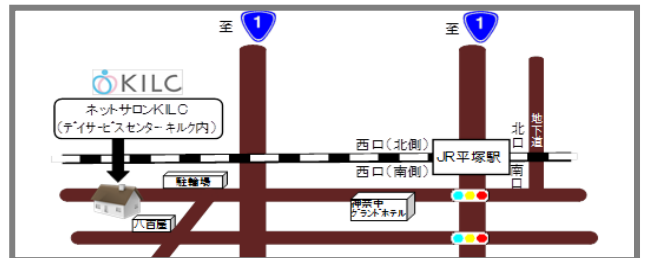
障害者自立生活センター（法人本部）

〒243-0035
厚木市愛甲 1-7-6
Tel: 046-247-7503 / Fax: 046-247-7508
Mail: info@kilc.org



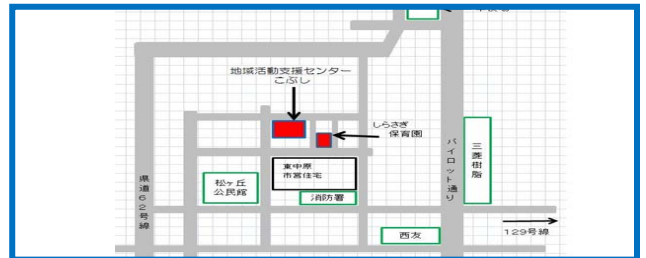
デイサービスセンター・キルク

〒254-0815
平塚市桃浜町 2-36
Tel: 0463-35-2710 / Fax: 0463-35-2786
Mail: day@kilc.org



地域活動支援センター こぶし

〒254-0077
平塚市東中原 2-14-19
Tel & Fax: 0463-34-2259
Mail: hinoki1@comet.ocn.ne.jp



会員 募集

KILCの活動を
支えてくださる方を
募集しています。

正会員

個人 年会費一口 2,000円 を、一口以上
団体 年会費一口 5,000円 を、一口以上

賛助会員

個人 年会費一口 5,000円 を、一口以上
団体 年会費一口 10,000円を、一口以上

振込先 郵便振替

口座番号 00260-4-86367

名義 神奈川県障害者自立生活支援センター

編集後記

今回はキルク通信特別篇ということで、PDFでの公開となっています。ご意見、ご感想がありましたらメールにて info@kilc.org までお知らせください。

編集

特定非営利活動法人

神奈川県障害者自立生活支援センター
〒243-0035 神奈川県厚木市愛甲 1-7-6